

「私たちは、あなた達豊かな国の人々が、“豊かな国で頑張るための材料”にされたくはないのよ。」

幼子を抱えたおおよそ私と同じ年であろう少女は、そう言った。彼らの言葉を理解するには、誰か現地の人を通さなければならない。ニュアンスは、いくらか違えど、彼女はこんなことを言っていた。

私は、その言葉を正確に理解するのに、いくらか時間を要した。とても長い、長い時間を。17歳の高校2年生の時に、初めて訪れた途上国インドネシア。そこでの経験は、今も私の胸に強く、何かを問いかけ続けているのだ。

「世の中の何が幸せで、何が不幸なのか。」途上国を訪れ、何らかのボランティアに携わった大学生は、おおよそこのような大層なことを口にする。まるでそのたった2週間やそこらの体験が、自らの人生全てを変えたかのように。

自らの自己満足。浅薄な義憤。日本社会、資本主義、物質主義への密かな反抗。少し時間が経てば、そんな“社会”に何食わぬ顔をして溶け込んでいくくせに。彼らは、そんなとき、したり顔で口にする。「豊かな国に生まれた私たちが、貧しい国の子供たちの分も頑張らなくては。」主語と述語が全くかみ合っていない。しかし、不思議とこれは使い古された月並みな言葉だ。

途上国の子供たちに、本当に必要なものはなんなのだろうか。自分もその浅はかな人間の一人であると知りながら、私は毎年その国を訪れ、考え続けてきた。

私は、それを「13歳のハローワーク」だと感じた。みなさんこの本を知っているだろうか？村上龍による日本の書籍。514種の職業を百科全書[1]、あるいはエッセイ[2]の体裁で紹介した内容。(ウィキペディア参照)である。

まだ中学生になったばかりで、自分が何をやりたいのかも、自分に何ができるのかもわからなかった13歳のころ、母がそっと手渡してくれたその本。1つの本の中に広がる、自分の将来の無限の可能性に、心ときめかせたのを覚えている。

なぜ、それが途上国の子供たちに必要だと思ったのか。それは、私の日本への帰国が2日前まで迫った頃だった。ちょうど孤児院に訪れた季節が夏だったこともあり、日本の文化紹介ということで、七夕を子供たちと行った。

しかし、返ってきた七夕を見て驚いたことがある。50人の子供たちが書いた短冊には、たった5つの種類の職業しか書かれていなかったからだ。なぜこんなに選択肢が少ないのかと現地のスタッフに聞くと彼はこう答えた。「子供たちは世界の広さを知らないから、自分の身近な職業からしか夢が選択できない。」と言われた。

世界に、どのような選択肢があるのか。どれが自分に合っているのか、私たちは、かなり自然な形で見つけていくことができる。そこには、SNSやメディアから与えられた情報があるし、身近には成功例もある。しかし、そのどちらもない子供たちはどうやって自分の個性を見極め、可能性を知り、将来を叶えるプロセスを知ることができるだろうか。

この世の中で子供たちにとって最も不幸なのは「知らないこと」だと私は考えた。世界の常識について、知らずに過ごす。教養を知らずに育つ。しかし、自分の可能性を知らずに過ごすこと以上に不幸なことがあるだろうか。選択肢さえ与えられず、過ごすことが。

ただ教育を与えること、資金を与えること、食べ物を与えること。それらは、すでに行われてきた。私は、新しい手段で、子供たちと向き合いたい。13歳のハローワークを通して、自分の可能性についての「希望」を子供たちに与えたい。

「どうせ、お前もほかの連中と同じだろう。」

今も、路上で出会ったあの少女の瞳が私に何かを問いかける。17歳の少女にしては細すぎる注射痕がはっきりと残る左腕をしっかりと抱きしめた。その後感じた、振り払われた腕の痛み。

その夜、止まらなかった涙を、50人の子供たちの美しい聖歌がどこまでもやさしく、慰めてくれていた。